

第 2 回検討会等における主な御意見

令和 2 年 7 月 30 日

農村振興局

MAFF

Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries

農林水産省

第2回検討会における主な御意見

【人材育成の仕組みの方向性・協同農業普及事業についての事務局説明】

- 1 ○県によって普及指導員の活用に差が出てきている印象。現場の話を聞くと、県としての姿勢がしっかりしている県は、農村振興のために地域に入りやすいが、そうでない県は、普及員の思いがあっても、現場への訪問頻度が増えなかったり、仲間がいないため相談ができず悩んでいるという話を聞く(関司委員)。
- 2 ○農業改良普及は、かつて、地域普及と技術普及という言い方で、車の両輪を維持していた。平成16年の普及改革でかなり技術の方にシフトしたと思うが、今回の基本計画の見直しで、普及においては、車の両輪の議論はどうだったのか(小田切座長)。
- 3 ○普及職員の年齢構成について、20代は、H26の4%やH30の6.7%など、若い人が普及員になる道筋がうまく作り切れていないと思う(指出委員)。
- 4 ○普及事業の新たな運営方針の案が示されているが、改めて、むらづくり、地域づくりを柱に掲げていくことが望まれる(平井委員)。

【a. 地域づくり人材に必要なスキル】

〈ゲストスピーカー・委員発表(次ページへ続く)〉

- 5 ○地域の人に対し、何が困っていて、何をやればよいのか気づきを与えるとともに、話し合いを行うというきっかけづくりが大切(高橋課長)。
- 6 ○地域の課題解決というが、課題と一言で片付けてよいか疑問を持っていて、地域の特徴、強み、弱みなどから生じる将来への不安をどう解消するかに力を入れてきた(高橋課長)。
- 7 ○話し合っただけでも、継続できなければ意味がない。周辺の集落も一緒になって活動に広がりをつけていくことが重要(高橋課長)。
- 8 ○自ら①地域に関心を持ち、②参加したくなり、③地域を発見し、④理解し、⑤新しいことを生み出していくことを、段階的に行うことが大切。ただし、行政がずっと面倒を見ることはできないので、少しずつ住民側に力が配分されるように支援することが大事(高橋課長)。
- 9 ○地域への支援の中で、何のために誰がいつ何をするかを記載した地域の行動計画書を必ず作ることとしており、5年ごとに見直し、住民がその都度確認できる仕掛けにしている(高橋課長)。
- 10 ○地域のある瞬間の断面的な課題ではなく、地域が今までどのように動いてきたかを振り返ることが大切。地域の動きが始まったきっかけは、外部からの刺激であることが多い(高橋課長)。
- 11 ○地域が動くために必要な力の割合は、課題への気づきが5割、計画と実行が3割、展開が2割。前二者の8割は地元が頑張るしかなく、そのための後押しとなる支援が望まれる(高橋課長)。
- 12 ○地域への支援では、行動計画を実践に移したときの持続性の観点から、話し合いを行う地域の括りを最初に診断している。一つの集落で駄目なら隣の集落を巻き込み、それでも駄目ならもう一つ広げるという発想。大字単位ではなく、集落単位で診断をやらないと先が続かないことが分かってきた。括りは行政が勝手に作れるものではなく、原案を作った段階で、聞き取りをしながら、人間性や地形の問題などを加味し、整理している(高橋課長)。
- 13 ○これまで、こういう時はこうした方がよいという知識である「Knowing-What」がよく使われてきた。内発性と持続性を確保するためには、その知識をどのように使っていくかという知識である「Knowing-How」や、何のためにやっていくのかを考える知識である「Knowing-Why」が重要(平井委員)。
- 14 ○目標や課題の設定を地域住民に分権することが内発性の条件(平井委員)。
- 15 ○地域の有力者だけでなく、地域の中で役職を持っていなくても何らかの役割を持っている嫁・婿などの「半よそ者」にも目を配っていくことが大事。「半よそ者」は、本当のよそ者、移住者、関係人口など地域につないでいくアダプターの役割を持っている(平井委員)。
- 16 ○課題、資源、福祉、教育といった概念、潤い、にぎわいなど抽象語にまとめると責任を持つ当事者がいなくなる。地域の人たちが自分事として自分たちのことを他の人に語れる言葉を組み合わせ引き出すのがファシリテーションの肝(平井委員)。
- 17 ○人材育成で一番大事なものは、関わる人が創発とイノベーションを起こしていく状況をどのように作っていくか(前神委員)。
- 18 ○ひとつの頑張っている事例を取り上げて横展開すると、地域は同質化してしまう。地域には、多様な人がいて、多様な形で活動し続けているのが通常の姿だと頭に入れておく必要がある(前神委員)。

〈ゲストスピーカー・委員発表(続き)〉

- 19 ○作られたネットワークの中では創発はなかなか生まれない。自生したネットワークはアメンバーのように自在に形を変え、寄り添ったり相乗効果を生んでいくような働きをする。ゆるやかなつながりは、今まで自分の知らなかった世界に出会うきっかけが生まれやすく、世界が広がる(前神委員)。
- 20 ○課題の解決を急ぐと、表面的に進めてしまい本質的なものに向き合っていないことがあるので、許容と包摂する寛容さのあるゆるさと、まだ言葉にもなっていないふわっと見えることを探索的に考え、価値創造することができるゆるくてふわっとした時間を持つことが大事(前神委員)。
- 21 ○危機感では人は動かず、不安で固まってしまう(前神委員)。
- 22 ○いま起きている小さな変化に気づけることが大事であり、そのためには既存の常識で判断しないことが大事(前神委員)。

〈意見交換〉

- 23 ○市町村や県の職員が、自分たちはコーディネーター側で、地域が主体だからと遠慮して、壁を作って結局何も動かないことが多い(若菜委員)。
- 24 ○高橋課長の「地域づくりプランナー」、平井委員の「のび太理論」、前神委員の「インターミディエーター」の通底しているところは全て同じ。前に出過ぎず、場の空気を読んで言語化することで、人と人との対流を生み出すような性質が人材育成を広く考える上で重要(指出委員)。
- 25 ○地域の歴史を振り返る時に、人の動き方とか、大変な時にどう乗り越えたのかといった経験知を形にしていけることが今につながるし、新しい取組にチャレンジするパワーの源にもなる(岡司委員)。
- 26 ○「危機感か理想か」という二者択一ではなく、「希望」を持てるかどうかの方が大事ではないか。あるべき地域の将来像を実現する上で不足する業種の人材の数を把握した上で、藤山浩氏の「1%理論」のように、毎年何人確保すればよいかといった実数を把握する。それをもとにして、AIやマルチワーカーなど多様な手段でそれをどうカバーするかを地域で考える。そのように、「これができれば地域を維持できる」と希望を持ちながら、着実に取り組んでいくあり方が大事(嶋田委員)。
- 27 ○危機感から問題解決型で活動を始めるケースもあるが、「ワクワクするからやる」「やりたいからやる」という価値創造型で取り組んでいるケースでは活動が持続しやすいことにも注目するとよい。ワクワクから始められた活動を地域の課題解決に“つなげて”あげる役割を担う人がいると効果的で、活動の「Why」「What」「How」などの文脈をつなぐ演出家兼脚本家のような存在が、地域の取組を前進させるポテンシャルを持つと感じる(谷中委員)。
- 28 ○3人の委員の報告や谷中委員からの発言があったが、人材育成というよりも、地域の発展プロセスに人材がどう関わるかが大事(小田切座長)。
- 29 ○地域づくりの活動を始めたら支援が終わるのではなく、継続的に支援していくべき(川井委員)。

【b. 地域づくり人材を育成する方法】【c. 地域づくり人材の資質を担保する方法】

〈ゲストスピーカー・委員発表〉

- 30 ○持続的な地域づくりのためには、危機感と補助金をベースに動くよりも、こうありたいという小さな理想を実現する成功体験の積み重ねから、手応えが連鎖して仲間ができていくことが大事。そうすると自ずと状況に順応するかたちにもなる(平井委員)。
- 31 ○地域づくりプランナーという認定制度を作っており、基礎的研修から現場での実践研修までの4段階の過程で徐々に選抜する仕掛けにしている。現在18名のプランナーがいる(高橋課長)。

〈意見交換〉

- 32 ○子どもを活動にどう巻き込んでいくかが一番大事。子どもも一緒に参加することによって、そこからリーダーが自然に育つ(川井委員)。
- 33 ○今回ご紹介いただいた山形県の人材育成の取り組みや長野県飯田市の公民館主事への配置を通じた地域人材育成の取り組みに、他の自治体から派遣し、「暗黙知」を現場で学んでもらうような仕掛けがありうるのではないか。農村部の自治体からだけでなく、都市部の自治体からも学びに行ってもよい。現場に行くことによって、コミュニケーションや調整能力を学ぶ機会になるし、関係人口にもつながる(嶋田委員)。

【d. 地域づくり人材はどのような立場の人がふさわしいか】

〈ゲストスピーカー・委員発表〉

- 34 ○最終的に支援を強めなければならないのは、市町村職員なので、地域リーダーと一緒に研修をしている(高橋課長)。
- 35 ○みんなが頑張っ初めて成立する組織モデルは、誰かが欠けたり誰かの力が弱くなると維持できず、世代交代できない。100%、120%力が発揮できる存在ではなくても、「ドラえもん」で、周りのみんなの力を引き出すのび太のような存在が大事であり、能力がそろわない多様な人たちが一緒になって地域づくりをしていく方が世代交代につながる(平井委員)。
- 36 ○いくつかある人的支援制度を同時に組み合わせたり、人生100年時代のキャリアプランに沿って運用したり、複合的に活用することが大事(平井委員)。
- 37 ○多様な関係性の網の中で、あいだをうまく橋渡しできるようなインターメディエーターの役割を持った行政職員が今後一層必要になる(前神委員)。

〈意見交換〉

- 38 ○地域内の人材も必要であり、中山間地域は特に人材がいないので、人材育成をする際にはそこを意識しなければならないと思っている(若菜委員)。
- 39 ○私の母や祖母の時代は、普及指導員が生活の活性化のための活動をしていた。普及指導員や、生活指導員、営農指導員などの活動が今こそ非常に大事ではないか(川井委員)。
- 40 ○地域の中で動かす人材と地域の外で動く人材の両方が大事だが、地域おこし協力隊は、前者の人材を生み出し始めたことに意味があったと思う。これまで、地域外の人材は、コーディネートすることまでで止まっていたので、今の時代に合うように既存の人材制度を組み合わせながら、活用する視点を持つ方がよいと思った(岡司委員)。
- 41 ○「希望」という議論があった。私も「可能性の共有化」と呼んでいる。地域の可能性をどう共有化するか。目配り人材である集落支援員などの制度を農業的・農村的にどう利用できるのか、あるいは、農水省版をどう作るのかという発想が求められている(小田切座長)。
- 42 ○人材育成の仕組みを作っていく上で、集落支援員、地域おこし協力隊、普及指導員など様々なプレイヤーがいるが、これらの役割を整理して組み合わせるモデルを作るのが良いのか、それとも、地域実態に応じてやれる方がやれば良いという発想に立つのが論点ではないかと理解した(小田切座長)。

【その他】

〈意見交換〉

- 43 ○先日長和町に地域おこし協力隊の隊員が支配人となっている直売所をオープンした。この直売所は、地域の協力をいただき、今まで4つあった直売所を1つの生産者組合にしたもの。単に野菜を売る直売所ではなくて、町の人たちが集まり、情報や人をつなぐ町の拠点としての大きな役割を果たすことを期待している(羽田委員)。
- 44 ○人材を「こうしようああしよう」と躍起になって育成するのではなく、誰もが参画でき、自然にそこで出会える場を作ることが大事(前神委員)。
- 45 ○都会と地方の遠隔自治体間連携という取組を始めていて、連携の先にはお互いの希望があると感じている(前神委員)。
- 46 ○「長期的な土地利用の在り方に関する検討会」の委員もしているが、この検討会とダブる要素もあるので、情報を共有しながらやりたい(高橋課長)。

(参考)

第2回長期的な土地利用の在り方に関する検討会
における主な御意見

(人材育成に関するもの)

【a. 地域づくり人材に必要なスキル】

- 1 ○市町村職員が、地域の現状をデータ等で伝えることが重要(笠原委員)。
- 2 ○範囲が大きいと話が進まない。集落や自治会で話をした上で、隣の集落と一緒にする方法はあり得る(笠原委員)。
- 3 ○家庭内合意形成は、一番悩むところで、「家に帰ったら反対された」というケースもしばしば。少なくとも、「今日の集まりはどんな内容で、自分はこういう方向で話をして、集落ではこういう方向になった」と言うことを報告できるようにしたいと意識している(笠原委員)。
- 4 ○コーディネーターの重要性を感じているが、まずは信頼してもらうことが第一歩だと思っている。信頼を得た上で、「集落が今後どうなってほしいのか、自分の子孫に恥ずかしくないような集落づくりをしよう。」などと声がけしながら活動するようにしている(笠原委員)。
- 5 ○現役世代だけでなく、若者世代が入り、農家・非農家の枠を超えた話し合いが必要(高橋委員)。
- 6 ○一つ一つの集落で話し合いをしてきたが、一つの集落ではもう完結できない。これからは、里海から里地、里地から里山、と話し合いの括りを広げていくことが必要(高橋委員)。
- 7 ○1回の話し合いで全てが解決することはまずなく、話し合いを重ねることが必要。人・農地プランや中山間地域等直接支払の集落戦略等をかみ合わせることも必要(高橋委員)。
- 8 ○プランナーが一番大事にしているのは「話し合いの括り」を決めること。そのために、集落単位で、人材、コミュニティ等の有無等を調べ上げ、カルテを作っていく(高橋委員)。
- 9 ○話し合いの範囲は、できる限り小さい範囲が基本。2つの集落の話をしたが、聞き取りと話し合いは集落単位が基本で、最終的に我々が診断した適切な集落の括りに合わせていくようにしている。そうした丁寧な対応が必要(高橋委員)。
- 10 ○家族と話し合いができなくても隣人とならできるもので、これをうまく使っている(高橋委員)。
- 11 ○地域の話し合いの中で、土地の話が少しでも出てきたら何段階かに分けて話を広げていく、ということ、山形県では大事にしている(高橋委員)。
- 12 ○時間軸を強く意識した上で、複数の未来を想定した戦略を立てることが必要(林委員)。
- 13 ○議論の枠組みを広くするか狭くするかは、狭い方がまとまる一方で、広くするにもメリット・デメリットがあるため、よく議論する必要(林委員)。
- 14 ○ネットワークでつながる地域同士は必ずしも対等ではないので、両者にメリットが必要(林委員)。
- 15 ○最初から農地の話をするのではなく、廃校跡地の活用など、農家以外の住民も話し合いやすい切り口から入り、そこから農地の話をしていくということも有効ではないか(安藤委員)。

主 な 御 意 見

No.	
16	○ <u>膝詰めで議論するには小さい単位が良い反面、アイデアの広がりが出にくいので、広域で行うのも小さい単位で行うのも、それぞれ一長一短がある(安藤委員)。</u>
17	○ <u>人・農地プランの実質化については、家庭内で合意形成ができてない場合、家庭内状況まで寄り添うべきかが課題となるのではないか(安藤委員)。</u>
18	○ <u>話し合いが必要な理由を最初に理解してもらうことに時間をかけることが重要。最終的には多様な主体の参画の下での合意形成が必要だが、小さい単位での意識付けは必要。話し合うべき最終テーマにたどり着くまでの、序盤のプロセスを考えて貰いたい(広田委員)。</u>
19	○ <u>若者や非農業者を巻き込むためのコーディネートをする人の存在も重要(深町委員)。</u>
20	○ <u>地域の年配者の水管理、防災などの知恵や経験を活用する視点も必要(深町委員)。</u>

【b. 地域づくり人材を育成する方法】【c. 地域づくり人材の資質を担保する方法】

21	○ <u>合意形成を図っていくためのコーディネーターの確保は必要だが、高いスキルが要求されることも事実。短期的な研修で、どのくらい機能しているのかは、気になる(田口委員)。</u>
----	--

【d. 地域づくり人材はどのような立場の人がふさわしいか】

22	○ <u>本来は、近くにいる市町村職員が地域をみるのが基本。ただ、昨今のマンパワー不足と人事異動で、地域との信頼も0からとなりがち。このため、県内異動の県職員が現場を借りながら、市町村職員や地域のリーダーを並行して人材育成していこうとしている(高橋委員)。</u>
----	--